



萩の雨

連城三紀彦

mikibiko renjyo

萩の雨

連城三紀彦

mikishiko renjyo



講談社

H70389

萩の雨

連城三紀彦

mikibiko renjiya



萩の雨

定価 一〇〇〇円(本体九七一円)

著者 連城三紀彦

一九八九年十月十三日 第一刷発行

一九九〇年三月二十日 第二刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五一―一一一 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Mikiniko Renjo 1989 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本に
ついてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願
いいたします。

目次

萩の雨

5

柳川の橋

39

会津の雪

71

みちのくの月

105

北京の恋

139

輪島心中

173

装画／荒井富美子
装幀／石川 勝

萩
の
雨

萩
の
雨

「私が急に行けなくなつて……娘一人を行かせますので、手紙に書いた通り、二時にホテルのロビーで待っていていただけます」

腕時計を見ながら、昨夜突然かかってきた行衣ゆきえからの電話を一字一句間違ひなく思い出そうとした。「お嬢さんの顔を知らない」笠原がそう言うのと、行衣は小さく笑い、「見ればすぐにおわかりになるわ」鈴のような笑い声の余韻よゐんが消えないうちに、挨拶あいさつもなく受話器をおいた。

「見ればすぐにわかる」という言葉を、行衣は「私にそっくりですから」という意味で使つたのだと解釈する他なかった。

だが、腕時計の針は二時をもう二十分近く回つてゐるのに、行衣と似た若い娘はロビーに現れていない。五、六人の女子大生らしいグループが、笠原のすぐ近くのソファに座り、「この雨では自転車で回れないわ」といった話をしている。萩は小さな町であり、自転車を借りて観光する旅客も多い。そのグループの中にも行衣と似た顔はなかった。

もっとも行衣の顔はもう二十二年見ていない。笠原の親友である野中捷三しやうちゆうざうと結婚し、三ヵ月目にこの萩市を訪ねてきた際、会つたのが最後である。

野中とは大学時代四年間を通して、親しく交際した。東京の丸の内に巨大なビルを持つ大手商社に入り、エリートコースを走り出した野中と、大学卒業後郷里の山口に戻り、家業の小さな焼物問屋を継いだ笠原とは、人生の道も東京の高速道路と地方の田舎道ほどの違いとなったが、それでも年に二、三度、得意先のデパートや民芸品店を訪ねて上京する機に会っては、交友の糸を細く繋いできた。

大学を出て一年目に上京した際、野中は色白の、東京では珍らしい静かな肌をした女性を連れていた。上司の娘だと紹介されたが、その年、夏と秋とに上京した際にも三人で会い、秋の上京の際、別れぎわに、「年が明けたら結婚することになった」と聞かされた。

それが行衣である。

新春早々、東京のホテルで開かれた披露宴に出席し、それから二ヵ月後の上京の際、新居である世田谷のマンションを訪ね、さらに一ヵ月後には、行衣が一人でこの萩を訪ねてきた。結局、当時ですら数回しか会ってはいないのだが、二十二年が過ぎ、この三月初め、行衣は突然のように一通の手紙を送ってきたのだった。

「来月、娘が結婚することになりました。その前に一度母子二人で旅をする事になって、結局萩を訪ねることに決めました。二十二日の午後二時、都合がおつきになるなら、ホテルのロビーにいらして下さい」

薄い和紙の便箋にただそれだけの言葉とホテルの名が記されていた。二十二年会ってはいないが、電話では何度か声を聞いている。上京を野中に報らせる際は、できるだけ会社に連絡を入れ

るようにしているのだが、それでも時々世田谷の自宅の方へ電話を掛けなければならないことがあった。

「笠原さん？ お元氣なんですか。一度また家へもお寄りになって下さればいいのに」

電話で、行衣は必ずそんな儀礼的な言葉を言い、後は、「今、野中と替わりますから」とか、「まだ野中帰っていないんです。帰ったらこちらから連絡させますわ」とか、必要な言葉しか口にできなかった。二十二年ぶりに自分の方から送ってきた手紙でも、昨夜になって突然「自分は行けなくなったから」と断ってきた電話でも、行衣は夫の友人への言葉を最小限に押えているように思えた。

そんな風にわずかな言葉だったが、それでも声が、二十二年間少しも変わっていないことが笠原にはわかった。昨夜の電話の声も昔初めて会った際に、「そう、きれいな指をしてらっしゃると思つたら、やはりきれいな物に触るお仕事をなさつてるのね」そう言つた時の声と少しも変わっていない。

その声のせいだろう、この二十二年のうちに行衣がどんな風に変つたかと想像しても、笠原の頭に思い浮かぶ顔は、昔の倅おもかけのままである。

その倅を、ロビーに若い娘が現われるたびに重ねてみるのだが、どの顔も違っている。

二時半になり、笠原は立ちあがつた。野中と会う際には必ず娘の話が出るから、名前はわかつていて。フロントで尋ねてみようと思つたのだが、カウンターの手前で笠原は足を止めた。

エレベーターから和服の娘が降りてくるのが目にとまつたのだつた。

右眉の端を隠すようにして片方に流れ落ちた髪が肩のあたりで短く切り揃えられている。色の白い顔に目と唇がくつきりとした線で描かれている。

娘はフロントに歩み寄ると、部屋の鍵を預け、笠原のすぐ脇を横顔で無視するように通り過ぎ、玄関のガラス扉から外に出た。そこで手にしていた道行コートを着ると、ベルボーイに何かを語りかけた。道を聞いたらしい、頭をさげて礼を言い、傘をさすとボーイが指さした方向へと歩きだした。

何かに引きずられるようにして、笠原はホテルを出ると、自分も黒の蝙蝠傘をさし、雨の中をその娘を追って歩きだした。

娘の水色の傘は、ホテル前の通りをまっすぐに進むと、川の手前で左に折れ、川に沿った筋のように細い道をどこまでも歩いていく。

数メートル離れ、娘の緩やかな、道を嘗めるような足取りに合わせ、笠原はゆつくりと歩いた。雨といつても煙のように細い。ただ暦ではもう春も間近なのに、細い雨にはまだ冬の冷たさと暗さが残っていて、城下町らしい歴史の古さを感じさせる家並みから、色を奪っている。無彩色の景色の中で、水色の傘だけが鮮やかな色彩だった。

濃紺のコートも、臓脂に黒いぼかしの入った着物も、娘の年齢とは不釣合に地味で、雨に暗色で溶けこんでいる。咄嗟に娘を追ってホテルを出た際には気づかなかつたが、どこまでも川に沿って進み、やがて川幅が不意に広がるあたりにかかった石の橋を渡る頃になって、自分をあの瞬間引きずったのが、その着物の色だったのだとわかった。二十二年前、この町を訪れた日に、

行衣が着ていた着物だった。黒いぼかしが、墨でもこぼしたように、模様というには頼りない線で、臙脂の地色に滲んでいたのを、笠原は今でもはつきりと思いだせる。

当時、行衣は二十三歳だった。結婚したとはいえまだ娘らしさを棄てきつていなかった行衣には地味すぎる着物だと感じたことも、昨日のことに憶えている。

行衣の娘に違いなかった。

行衣の娘なら、しかし、山口市に住む父親の友人がホテルのロビーに訪ねてくることを聞かされてはいるはずである。それなのに何故ロビーでそれらしい男を探そうともせず、すぐに外へ出てしまったのかはわからなかったが、娘がその石の橋を渡り始めた時、笠原はもう間違いないと思った。

娘は橋の上で足をとめ、雨脚を吸って流れる川をしばらく眺めていたが、やがて水色の傘を一度くると回転させて歩きだし、橋を渡って続く道の最初の曲がり角に消えた。笠原はゆっくりと後を追った。慌てる必要はなかった。橋を渡り始めた時から娘がどこへ行こうとしているのか、わかっていた。

曲り角に立つと、そこからまっすぐに長く道が続き、その道に沿ってどこまでも土塀が流れている。萩市でも土塀が最も美しく残っている道の一つである。娘はその道を歩きに來たのに違いなかった。

二十二年前、笠原が行衣と歩いた道である。その後も仕入れなどでこの町を訪れる度に、笠原は必ずこの土塀の流れを見に來た。笠原の足が一番よく知っている道でもあった。二十二年間、

四季の折々に歩いて、季節によって同じ道が微妙な変化を見せることも知ったが、笠原の中で一番鮮やかなのは、やはり、あの行衣とたった一度歩いた早春の道である。

西に傾いた陽は、沈むまでの短い間、真夏のような激しい光で土塀を焼いていた。土塀の瓦へと荒波のように、生い繁った夏蜜柑の葉が襲いかかっていた。かすかな風に葉は騒がしく揺れていた。暗い色の着物を着て、たたずんでいる行衣の姿だけが静かだった。まっ白な入陽に消えてしまうように、その静かさには幻に似た掴みどころのなさがあつて、土塀にその姿をそのまま映している影の方が、くつきりと濃く、實在感があつた。二人はただ黙つて崩れた土塀の、露になつた土の色を、その土色に染みた二つの影を眺めていた。二つの影は、わずかな透き間を開けて離れたまま、やがて緩やかに訪れた夕闇に消えた。土塀はほとんど剝がれて土の荒い膚をむきだしていたが、それでも所々に白釉をしたたらかさのように白い塗りが波状を描いて残っている。夕闇の中で、その白さだけが、いつまでも暮れ残っていた。

あの時の入陽の光や行衣の影を二十二年の歳月の彼方に消し去り、細い雨は土塀を音もなく濡らしている。

土塀を眺めながら歩いているのか、さらに緩くなった足取りで、水色の傘の後ろ姿は先を進んでいく。長く続く土塀の中途の、二十二年前二人が佇んだあたりまで来ると、前方の娘は道のつき当たりにとどり着いて角を曲がった。そこで鉤形に折れ、道も土塀も短く続いて、すぐにまた鉤の字に折れる。「追回し筋」と言つて、昔、侵入してきた敵を追ひこむために作られた特殊な構造の道である。道も土塀も短く両端を切つて、袋小路のような印象を与える。いわばまっすぐ

な迷路なのだが、笠原がその角まで来た時には、土塀と雨とに塗りこめられた短い道に娘の姿はなかった。その短い道を抜け、次の角に来ても前方に人影はなかった。笠原は足を早め、また次の角を曲がった。

人氣ない、雨の煙る道にはただ土塀だけがひっそりと流れている。雨雲のせいだけでなく瓦の上方に連なる夏蜜柑の葉が、道を暗くしている。その夕暮れのような暗い道を、笠原は何度も鉤の字に曲がりながら、娘の姿を探した。だが、どれだけ歩いてても水色の傘が視界に戻ってこない。出口のない迷路に迷いこんだような焦燥が笠原に起こった。ホテルに戻って待つていればまた逢えるはずなのに、今、この道で見つけなければ永久にその娘を見失ってしまいそうな、理由のない不安に襲われた。土塀に沿って何度も角を曲がるうちに、いつの間にか両端の途ざれた袋小路のような道に戻っていた。

昔の兵士のように鉤の手になった土塀の道に行き場もなく追いこまれた気がした。

諦（あきら）めて引き返そうと思い、ふり返って笠原は胸の中で小さく叫んだ。それまで背を向けていた道の角に、しゃがみこんだ娘の姿を見つけたのだった。娘は水色の傘で顔を隠し、白足袋のはね泥をハンカチで拭（ぬぐ）っている。

笠原が黙って近づくと、娘は待ち構（まちかま）えていたように、立ちあがった。雨脚が石垣を煙らせる中から、すっと浮かびあがるように立ち、同時に傘から顔を覗（のぞ）かせた。円（まる）い澄んだ目が微笑をふくんで笠原を見つめた。

「笠原さんでしょう？ 母から聞いてました」